



第 63 回「未完の天才 南方熊楠」の言葉

志村真幸著、「未完の天才 南方熊楠」（講談社現代新書 2710、講談社 2023 年 6 月）は異色の在野研究者、南方熊楠の生涯を研究する著者による優れた解説です。だいぶ前に神坂次郎著、「縛られた巨人」（副題「南方熊楠の生涯」）（新潮文庫 こ 21 2、新潮社平成 3 年 12 月）を読み、大まかな知識を持っていましたので、本書を読み、研究に対する南方のユニークな姿勢を久しぶりに再認識することができました。

他書と同様、本書の大半は南方の前半生の紹介に費やされていますが、最後に後半生でのキノコに関する研究をとりあげ、本書の主題に関わる著者の論評がクライマックスを迎えます。すなわち南方はキノコに関しては全くと言っていいほど学術的な報告をしていないことを指摘し、南方の研究を「未完成」という言葉で特徴づけ、「研究とは終わってしまっはいけないもの」と記しています。そして著者は、「南方の研究には完成が無い。しかし引退もなかった。それは研究者、いや人間ならだれもが夢見るような、幸せな人生」と記します。要するに簡単に答えが出て、論文にしたらおしまい、といった研究ではないのです。

さらに著者は「こうした南方の在り方は、短期間で結果を出し、アウトプットを欠かさないことを求められる現在の学問状況に異議を突き付けるものである。アウトプットしなければ何もしていないも同然と思われがちだが、実際には南方のように、はちきれんばかりに豊かな学問もありうる」と記し、最後に「結論を出すために学問をしているわけではない。学問をすること自体が楽しく、充実した時間なのだ。むしろ怖いのは、終わってしまうことなのだ。やることがなくなり、追及すべき「謎」がなくなってしまうたら、どうしたらいいのか。」と結んでいます。

以上の論評には現代に生きる我々も見習うべき本質的な視点が含まれています。現代では研究成果を論文の形にまとめ発表しなければ研究者として評価されません。しかしそれと並行して息の長い研究を行い次の世代に引き継ぐことも重要なのです。このような研究では結論を出すことは難しいでしょうが、それでもかまわないでしょう。

「成果報告」と「次世代への引継ぎ」とを両立させる人は極めて稀です。さかんに「成果報告」して多くの研究資金を獲得し、著名な賞を受けている研究者たちの中にはやがて研究ネタが尽きてしまう例をしばしば見かけます。世界で流行している話題に飛びつき、後追い研究、すなわち「習う研究」をした結果、上記の「やることがなくなり、追及すべき「謎」がなくなってしまうた」のでしょう。「作る研究」が大事です。一方、単に他人の研究の評論を重ねているだけの活動も見られます。これは世間話にすぎず、「次世代への引継ぎ」の例ではありません。結論が得られないという点では共通しているかもしれませんが。

私自身は現代の未完の問題としてのドレスト光子の生成とエネルギー移動、その基礎となるオフシエル科学を追求することを研究の目標としています。今後も充実した時間を過ごせそうな予感がします。そのため何人かの研究者に指導をいただいています。これらの方々には上記の両立をめざして着実に活動されており、敬服の限りです。